

トロント補習授業校児童生徒の日英作文力の実態

トロント大学名誉教授

中島和子

報告3「海外で高度なバイリンガル書き言葉をどう育てるか」

高度な「バイリンガル文章力」とは？

今回は、最後の報告になりますのでトロント補習授業校の作文教育の究極の目標である「海外で高度なバイリンガルの書き言葉をどう育てるか」というテーマでご報告したいと思います。報告1で、2言語の作文力の共有面の中核にあるのが、(1) 時間内にどのくらいの長さの作文が書けるか（産出量）、(2) 構成がしっかりとした作文が書けるか（全体の構成）、(3) 豊かな語彙を使って書けるか（異なり語彙）と述べましたが、それに報告2で扱った(4) どのくらい漢字を使って書けるか（異なり漢字数）を加えて、(1) から(4) を「2言語共有作文力」の構成要素と考えたいと思います。さらに「2言語共有作文力」を基礎的な「バイリンガル作文力」と高度な書き言葉の「バイリンガル文章力」に2分する必要があります。実は、トロント補習授業校の作文データは、前者の「バイリンガル作文力」の分析には最適なのですが、後者の「バイリンガル文章力」には、中学生の人数をより増やして高校生までを含めた研究が必要だということが分かりました。つまり、「バイリンガル文章力」の獲得には、かなり時間がかかり、高校までを含めて考えるべきことだということです。それで本報告では、「バイリンガル文章力」の中の「語彙力」と「構成力」のみに焦点を絞ってご報告したいと思います。

英語を書く力を獲得するのにどのくらい時間がかかるか

まず一般論ですが、ニューカマーの子どもがカナダの学校教育を受け始めて、いったいどのくらいで英語母語話者に追いつくのでしょうか。先行研究では、会話の流暢度は2年、教科学習に必要な「教科学習言語能力」(Academic Language Proficiency) と呼ばれる高度の読み書き能力や教室談話・教科用語の習得には5年から7年、もし母語がしっかりしていない場合は5年から10年かかると言われます。これはカナダの研究ですが、米国のカルフォルニア州の

調査でも同じような結果が出ています。スペイン語系小学生を調べたところ、会話力には3年から5年、読み書きは4年から7年、特に書く力は小学校低学年では英語母語話者と比べて約1年遅れ、高学年になると2年遅れで、特に5年生くらいの学齢における作文力の伸びが際立って遅いということです。

日本国内のブラジル人中学生の書く力を調べた中部大学の生田裕子准教授によると、日本人とほぼ同じレベルの作文を書くようになるのには、「構成と内容」は3年から4年、「語彙力」や「表記・文法の正確度」は6年から10年かかったということです。「構成と内容」は、滞日年数が長くなると日本人を追い越す場合もあるそうですが、「語彙力」や「正確度」では、10年経っても問題が残るそうです。この調査のブラジル人中学生はまだカナダのESLのようなしっかりとした支援システムがなく学習環境が大きく異なるため、そのまま比較することはできませんが、要するに異言語環境に投入されてまず身に付くのが聴く力、つぎが会話力、そして読む力、一番長い時間が必要なのが「書く力」だということが分かります。

「書く力」の習得で問題になるのが語彙です。報告2で東京のNew International Schoolの調査において、バイリンガルが特に優れていたのが図形認識だったと書きましたが、一番弱かったのは何かと言うと、それは語彙力でした。バイリンガル研究では、読解力などは相乗効果でモノリンガルよりも高度になるケースがあるのですが、語彙ではモノリンガルより低いのが普通です。では、英語母語話者と机を並べて教科学習をするには、一体どのくらいの英語語彙が必要なのでしょう。グレーブスの研究によると、4-5年生で1万2~5千語、6年生で2万5千語、中・高で4万語、成人が5万語だそうで、小学校5年生から6年生にかけての語彙が大きく伸びることが分かります。特に日常会話に使う生活語彙ではなく、学習に使う教科語彙となると抽象度が高く、使う頻度も低いため、その習得に子どもたちが一番苦勞するのです。このような抽象度の高い語彙は、4年生ですでに学校使用語彙の75%も占めているそうです。カナダのニューカマーの子どもにとって、高度な書き言葉の文章を書くのに必要な語彙の習得は最大の難関で、母語話者に追いつくために年間少なくとも3000語は覚える必要があり、そのために週末も夏休みも返上して毎日8個は新しい語彙を覚える必要があるということです。

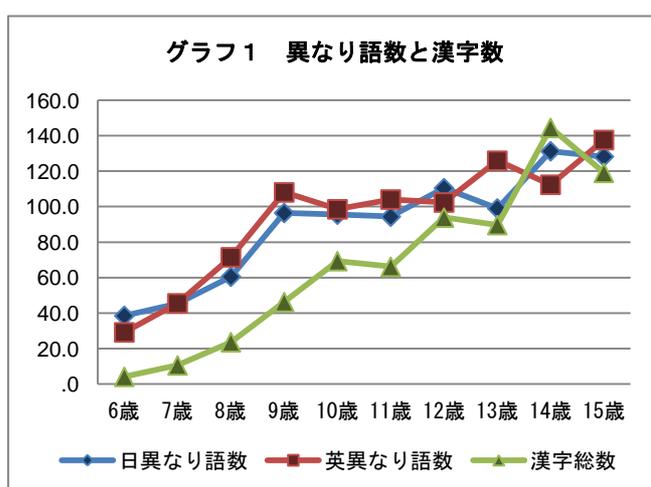
報告2で触れた「定住1.5世代」も実は、大学の作文教育に端を発した問題でした。留学生のための支援プログラムがたいていどこの大学にもあるのですが、

留学生ではなく、米国生まれ、米国育ちにもかかわらず英語の課題作文が書けない学生がいるということが指摘され、そこから会話は流暢でも書く力で母語話者レベルに達していない移住者、定住者の子どもが多いということが問題視されるようになったのです。

バイリンガル語彙力

では、日本語の語彙の習得の方はどうでしょうか。トロント補習授業校の作文データで漢字語彙も含めて語彙に関して分かったことをまずまとめてみましょう。グラフ1は、英語の語彙、日本語の語彙がかなり重なり合いながら伸び、それを追いかける形で漢字数が年齢とともに伸びていくことを示しています。

グラフ1では、使われた単漢字の数だけを見たのですが、つぎに漢字を語彙として捉え、国立国語研究所が開発した「茶まめ」という形態素解析ツールを使



って和語か漢語かという点から分類してみました。漢語が多いということがより書き言葉的な表現になるからです。たとえば、この調査では、作文テーマがカナダの紹介であったため、カナダについてさまざまな描写が見られたのですが、以下の例の(1)と(2)では、同じ内容でも、明らかに(1)の方が話し言葉的で

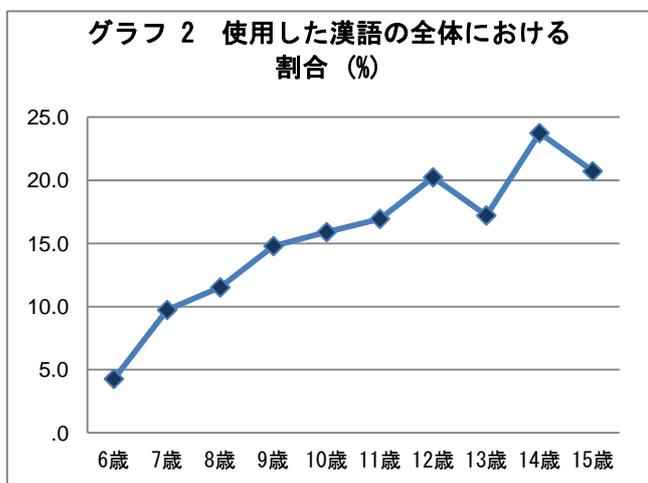
あり、(2)の方が書き言葉的な表現だと言えます。

- (1) カナダには、いろいろな国から来た人がたくさんいます。
- (2) カナダは多民族国家である。

(2) がどうして書き言葉的かというと、まず多・民族・国家という3つの漢語が使われており、意味が凝縮されていること、内容が抽象的であること、そして文末が「である」で終わっていることなどが主な理由です。また異なり語数の中で漢語が使われた割合を計算してみると、(1)は7.14%、(2)は50%となりました。

この漢語率が年齢とともにどのように変化するかを調べたのがグラフ2です。お茶の水大学付属小・中学校の日本人児童生徒の作文の漢語率を調べた研究に

よると、小学校 1-3 年で 20%、小 4-6 年で 30%、中 1-3 年で 40% 程度と報告されていますが、それと比べるとトロント補習授業校の漢語率はやや低めでした。これにはいろいろな理由が考えられますが、まず「カナダについて説明



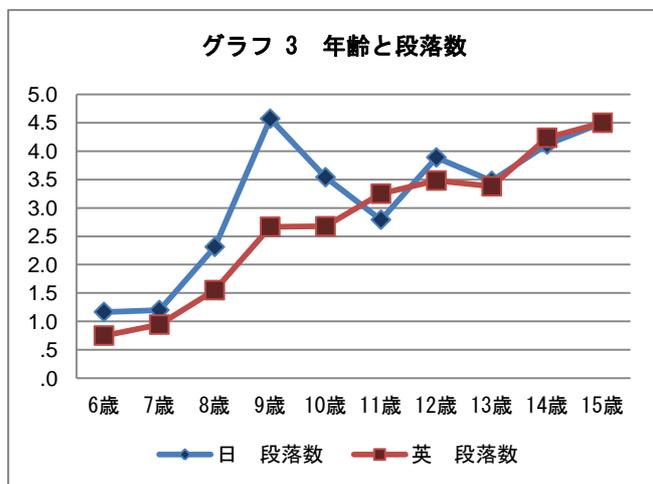
する」という作文テーマが漢語というよりは、外来語使用を余儀なくするトピックであったこと、あるいは一般論として、海外で育つバイリンガル児の場合は漢語の伸びにより時間がかかるということなのかも知れません。もちろん作文教育に特に力を入れている学校の調査であったこともその一因でしょう。

一方、英語では、いわゆる低頻度で抽象度の高い語彙を選び出すために、ニュージーランドで開発されたアカデミック語彙リスト(AWL)を暫定的に使うことにしました。AWLは、アカデミックな文章に用いられた語彙リストの中から日常語彙 2000 を取り除いて、それ以外の語彙から 570 語を選んだものです。小・中学生にはやや高度すぎるのですが、一応の目安として調べてみたら、AWL 語彙の習得状況も、ほぼ日本語の漢語率と同じように年齢とともに上昇していくことが分かりました。

そこで、滞在年数を統計的にコントロールして、漢語率と AWL 語彙との相関を調べたところ、8 歳未満では相関なし、8 歳以上 11 歳未満では弱度の相関、11 歳以上でしっかりとした中度の相関が見られました。つまり、日本語で漢語をより多く使用する児童生徒は、英語でも AWL リストにある高度な語彙をより多く使う傾向があるということです。そしてこの関係は年齢とともに強まり、その傾向がもっとも強く見られたのが 6 年生以上でした。またこの関係をバイリンガルの型で調べてみると、「日＝英高型」ではしっかりとした高度の相関、「日＞英型」と「日＜英型」では弱度の相関、「日＝英低型」では相関なしという結果でした。つまり、これまでの結果と同じように、年齢が高い方が、また両言語が高度であればあるほど、2 言語の相互補完的關係が強いということを意味しています。

バイリンガル文章構成力

つぎに文章構成力ですが、全体の構想をしっかりと立て、主旨のはっきりした



作文を連段落でどうまとめるかということです。その鍵を握るのが段落構成で、年齢別に見て段落の数がどのように伸びるかを示したのがグラフ 3 です。つまり英語でも日本語でも 3 年生から 4 年生にかけて段落意識がぐっと高まるようです。ただ実際は、形式的に段落があっても機能を果たしていなかったり、

形式上段落はなくても内容的には段落構成ができていたりということがあるので、主題の捉え方や段落意識をより正確に捉えるために、アイディアシートの分析をしてみました。アイディアシートとは、作文のアイディアをまとめるために使った一枚の紙で、1-2 年生用は絵を書くための大きな枠、3 年以上は 3 つの小さな枠と罫線があるものです。そしてつぎのような指示が与えられています。

「まずはじめの 5 分で、考えや思いを書いて、どんなことを書くか考えてから文を書いてください。考えや思いは絵でも字でもいいです。また、日本語で書いても、英語で書いても、たてに書いても、横に書いてもいいです。そのあと、作文用紙に文を書いてください。時間は 35 分です。」

このシートを実際に使った子どもは、日本語作文では 302 名(97%)、英語作文では 263 名 (92%) でしたが、年齢とともにその内容が見事に変化していくことが分かりました。小学校 1、2 年生はまず絵を書いて、その具象的なイメージを導火線として文を書いていく傾向が見られました。絵が主役です。小学校 3、4 年生になると、作文を書き出すきっかけづくりにシートを使用する傾向が見られました。そして段落を意識して主題を明確にし、全体の構想を練ることができるのが 6 年生ごろからでした。また日本語でそれが出来る子は英語でもできるという傾向も見られました。

1 点興味深かったのは、(a) 英語の作文に日本語でキーワードを書き、(b) 日本語作文に英語でキーワードを書くという、いわゆるジグザグの 2 言語使用で

した。(a) が 16 名、(b) が 28 名で、絵が中心の 1, 2 年生を除いてほぼ各学年にこの傾向が見られました。(a) は来加してまだ 3 年未満、つまり日本語の方が圧倒的に強いケースが 71%、(b) では、75%以上が現地生まれ、あるいは幼児期に来加した子どもたちでした。この 'translanguaging' という現象は、最近バイリンガルの特徴として注目されているものです。2 言語をリソースとして使うことはバイリンガルが日常実践していることであり、それを容認して、両言語の活用を奨励することが、高度のバイリテラル育成に繋がるのではないかと考えられます。実は、(a) にはカナダ生まれの子どもが 2 名ほどいたのですが、調査の場が補習授業校の教室であり、「トロント補習校では日本語で考えなければいけない」という学校のルールを忠実に守って、英語作文のアイデアシートに日本語でキーワードを書いたという可能性もあります。

プロセス・アプローチと親にできる支援

北米の作文教育ではプロセス・アプローチが一般的ですが、日本ではまだ聞き慣れない用語でしょう。プロセス・アプローチとは大雑把に言って、作文の生成過程を「計画」「初稿」「推敲」「発表」の 4 つのスマールステップに分け、その節目節目で教師が学習者と面談 (conferencing) を通してさまざまな支援を与えるという支援型の作文教育です。この対極にあるのがプロダクト・アプローチで、日本の作文教育でよく使われている方法です。プロダクト・アプローチというのは、子どもが一人で書き上げた作文を教師が読んで訂正したり、コメントをつけたりするものです。どちらにも利点と欠点がありますが、プロセス・アプローチの方が子どもが主体性と自信を持ちやすいこと、1 つの作文を仕上げる過程で周囲の大人との話し合いを通してさまざまな支援が得られることなどで、弱い言語で作文を書かなければならない状況の子どもには、大きなプラスです。

プロセス・アプローチでは、書く前のアイデアを練るところから推敲までさまざまな支援が可能です。ただし補習授業校のような週一日という教育形態では、教師がそのような支援することは時間的に無理なので、親が肩代わりをする必要があるでしょう。親でも、子どもの話し相手になって、書くテーマを決める手伝いもできれば、子どもがまだ知らない語彙や漢語をさりげなく与えることも出来るし、このトピックだったら「である体」で書いてみたらと勧めることもできるでしょう。

書くことは思考力を高めると言われますが、思考力は、テーマについて構想を練ったり、何度も推敲を重ねる過程で高まるものです。このために親がすべきことは、作文の書き方を教えるのではなく、あくまでも話し相手に徹することです。まず子どものアイディアに興味を示し、面白いね、と言ってあげることが子どもの自信、自己発見につながります。親が日本人の場合は、英語の方は子どもに任せて、日本語の作文生成の話し相手になることによって、書き言葉の作文力に必要な、高度な語彙や漢語に自然に触れる環境を作ることができるのではないでしょうか。このように日本語の側から「2言語共有作文力」を強めることが、ひいては英語の作文力を強めることに繋がるのです。また国際結婚のご家庭の場合は、親のそれぞれの母語で共有面を強めてあげるといいでしょう。

高度の「書く力」は、グローバル化が進む日本でもカナダでも、さまざまな職場で必要とされる大事な資質です。すばらしいトロント補習授業校のリテラシー教育と、世界的に見て非常に効果をあげていると言われるカナダ・オンタリオ州のニューカマー児童生徒教育の組み合わせで、一人でも多くの補習授業校の児童生徒さんが読み書きまでできるバイリンガル、あるいはフランス語やその他の言語も加えて、トライリンガルに育つことを願ってやみません。

(C)kazuko nakajima 2013